

触手に58回 イカされますwww

バカ!
お前みたいなゴミと付き合っ
暇なんてないんだよ。消えな。



触手スーツ



「はあ、はあ」

玉虫色の怪しい光沢と

ラテックスのような質感のスーツ

彼女の色気を最大限にまで引き出していた

180の豊富な女体に張り付き

体のラインが恥ずかしげもなく露にされている

奇抜ではあるが一見何の変哲も無い

このコスチュームの内側には

小ぶりな触手がビッシリと生えていて

常に180°の柔らかかな全身をネットリと舐め回していた



優しく、それでいてきつく拘束された

彼女の体の自由はもはや無い

表情以外の行動は、スーツによって全て制限されている

すなわち、スーツの主である人造人間セ〇の意志で

彼女の行動の全てが遠隔操作されていた



プリプリと弾力があり、しっとり濡れた数万本の触手が
首からつま先まで執拗に愛撫する
波のようにウェーブを描いて
丁寧に指先でなぞりあげられるようなその感覚は
強がる彼女の体すらも快楽に震わせるほどだ

勃起乳首やクリ○リスをねちっこく
攻め立てられると呼吸が荒くなる
ま○この入り口をクチュクチュと



なぞりあげたかと思えば、ふいにその快感が止んだりもする
女の子の気持ちいい場所の
全てを知っているかのようなその動きに
いじらしさを覚える
「んぐっ、ぐぐっ」

体の火照りが抑えられない事に動揺しつつも
動きが収まった事に多少なりとも安心する180
心を鎮めようと大きく息を吸ったその瞬間
ぞわぞわとクリ○リス周辺に快感が襲いかかる



何の遠慮もなく子宮の最奥まで突き上げる

グチユグチユに濡れた肉褌はすんなりと触手達を受け入れた

(いやあぁっ、何を！)

声を我慢できないほどの快感が体を襲う

その強烈な快感を隠そうと、体を小さく屈めようとする180○

すると突然、スーツは彼女の体をガッチリと締めあげた
背筋を反らし、腰に手を当てて
モデルのような歩き方をさせられる



屈めるどころか、むしろ周りの視線を
挑発するようなポーズを仕向けられる
スーツ内で彼等が背中を押し、
豊満な乳房が裏生地へと押し付けられる
(やめろっ！やめろお)

母乳をせがむ赤ん坊のように、
その大きな乳房へと絡みつく触手達
体中を常に攻め立てられながら
ファッションショーのような挑発的な歩き方をさせられる



周りを歩く男達の視線は
当然ながら彼女へと向けられる

必死に男達から視線を逸らそうとする
が、乳輪から勃起乳首にかけて
プルプルのミミズ状の触手が絡みつき彼女を蕩けさせる
同時にクリ○リスをシコシコと扱き上げ
子宮内にも無数の触手が更に侵入する



男の視線というものは実に素直で
彼らの彼女を見るその目は雄そのもの
それを180が気づかないわけがなく
その野獣のような視線の中を歩く事は
彼女にとって死ぬほど恥ずかしい行為であろう
(み、見るなっ！どいつもこいつもっ)

もし羞恥心というものに形があるのなら
今まさに、無抵抗のそれは男達によって視姦され
すぎ放題に撫で回されているのと同じだ



時折、白目を剥きそうな快感に襲われながら
小一時間ほど、人気のない工場地帯を歩き回され
ようやく主のもとへと戻る180

襦の間

そこで彼女の体は清められていた

彼女の着るその服はスク水のようにも見えるが
もっと極薄の素材

(小さな触手達が集まって形成されたもの)で
縫い上げられ、その柔肌へと
ピッタリと張り付いていた





突然、二本の触手が股間にへばりつく

「あああっ！」

緑色の触手の片側にピンク色の

柔らかいブラシ状の触手が何万本も生えている

クリ○リスを挟みこむように二本のブラシ触手が

息を揃えてゆっくりと前後に擦り上がる

(クソっ、クソおお！なんなんだコイツは！)



極薄スク水の生地ごしに、
触手の一本一本がプリプリと勃起していくのが伝わる
(んんっ！この動きっ)
何百本もの指先のような触手が
とめどない愛撫を繰り返す

時折、彼等の意志とは関係なしに

無造作にクリ○リスの包皮がまくり上げられ

逆向きになることでじわじわと包皮が被る

剥けた瞬間に、とてつもない強い快感が秘部を襲う

「……………!!!」

体の震えを隠そうとするが

媚薬の溶け込んだプールにより

彼女の体は思うように動かない

「やめる、や、めろっ……これ以上は!」





「くそっ！「ゴミ共っ！」
やめると言っているのがっ……アアア！」
密着したままの愛撫で腰が
浮くほどの快感を送り続ける
どんなに不感症な人間でも
これに耐えられる女はまずいないだろう



「……………つ……………!!」

体をガクガクと震えさせたまま

急に黙り込む18〇

声を上げず体を小刻みに振るわせるのが

この女がいく時の合図のようだ

彼女なりに上手く隠しているので一見すると
そうは見えないが触手達は彼女がイク瞬間を
しっかりと肌で感じている

「ア……ア……っ！」

反り返った体が強張り、足の指がググッと開ききる
その数秒間、呼吸は完全に止まり、快感に酔いしれる
言葉にすれば簡単な事だが、

そのイキっぷりは相当感度がいい女でない

感じられない程のオーガズムだろう





これ程感じながらも、意識が飛ぶ事もなく
尚も抵抗を続けられるのは
彼女の中で「触手達に屈する」ということが
死よりも屈辱的なのかもしれない
「あつ・・・ああ・・・」
先ほどまであんなにも激しく愛撫していた触手も
この瞬間だけは彼女を優しく見守る



こんなにもデリケートで、そして快楽に身を任せられる瞬間は他にはない
彼等はそれを十分に承知しているのだ
ビクビクと腰跳ねさせながらも、
徐々に体の震えが収まっていく180
今まで感じた事もないような強烈なエクスタシーに
彼女自身もかなり動揺しているように見える
(・・・ウソだっ、私がこんな・・・)

その表情は当然、男達を更に興奮させていく

突然スピードを上げて180°の快感を
高めたかと思えばヌルヌルとゆるやかに
速度を落とし、触手も柔らかさを取り戻す

(いや・腰がつ)

媚薬の効果で少しだけ腰を降り始める180°
するとその動きに同調するように片方の触手は上へ
もう片方の触手は下に動き始める
それぞれが別の方向に動きながら、

触手の一つ一つが先程よりも固く勃起する

「こいつっ、またっ」





トロトロの媚薬の量も更に増し、
勢い良く秘部を舐め上げ続ける
(やめろっ、これ以上はっ)

クリ○リスは両側からズリ上げるようにして

乱暴に剥かれる

そして、またもや果てる180

「-----」



彼女の体に浸透した媚薬が、
エクスタシーを増幅する
剥き出しになった女の弱点を曝け出すように
両足を更に開く180
それは媚薬の力によるものなのか
彼女の意思によるものなのか



スピードが緩み今度はそれぞれが
逆方向に動こうとしている
足を開いてその時を待つ180
それを待つ時間の長さをじわじわと楽しむ彼等
この後、この女がイクという事は誰もが知っている
あえてそれをしないという楽しみ方もあるが
彼らは素直に彼女の願望を形にした



彼女の気持ちに答えるように
逆方向へと移動する触手

「っづー……！！！」

勃起触手がズルズルと粘着質な
水音を立ててクリ○リスから尿道
アナルまでも、それぞれの形が
変わるほどに激しく擦りあげ続ける



彼女に、この瞬間を最も幸せなものと
感じさせるように、そして彼女の全てを
受け入れるかのように速度を上げ続ける触手
深い呼吸に合わせて速度を緩め
そして急速に上げ
エクスタシーをより長く楽しませる
「アっ!!アアっ!!.....」

クリ○リスが振るえ尿道付近がヒクヒクし始める
これは女が潮を噴こうとしている前兆

あんなにも強気な18○が

恥ずかしげも無く潮を噴く準備をしている

脳も体もそれを求めている限り

それは起こり得ない

これ程までに興奮できる事が他にあるだろうか



触手達は一斉にその手助けをする

そう、これは手助けだ

彼女が求める快感を「与える」その行為が触手達にとって何よりも快感となる

そしてこの先、何週間、何年間もこの禊の間での

彼女との戯れを待ちわびる理由となる

激しい水音が響き渡る

(やめる、今は・・・今だけはっ)

ブジュブジュと粘液が絡み合い、クリ○リス尿道、アナルに快感を送り続ける



彼女の体はイク準備を始める
足を開き、背筋を反らす

(くそっ・・・くそおっ!!)

こんなヤツらにつ・・・!!)

人目など気にせずイキ狂えるこの空間で

舌をだらしなく伸ばしきり

恍惚とした表情で受け入れ続ける

そしてついに彼女は潮を噴き上げた

「……………んぎいっ……………」





最高のエクスタシーにただただ

酔いしれる、イキ果てる

今この瞬間、死んでしまってもいいと女に
思わせる程の愛撫で攻め立て続ける触手達

ビクビクと体を震わせ

徐々に180の意識が朦朧としていく

乳しやぶりつき触手

上半身を包み込む触手

プリプリと突き出た乳輪に引っ掛けるようにして

多少、物足りなさを覚える快楽を与える

乳首の感度を上げる事により女の艶は格段に増す





更に目隠しをすることにより視覚に頼らない
真の快感へと導く

女の快感を磨き上げるこの触手によって

180の大きな乳肉が

優しく、丁寧に、数時間に渡って愛撫され続けていた

バクつと音を立てて乳全体を飲み込む

下乳に口を引っ掛けるように固定すると

タポンタポンと小刻みに上下に揺らし始める

「やあっ・・・!!」

包み込まれた触手内で乳首が擦れ

凄まじい快感に酔いしれるかと思いきや

胸の周りだけ真空に近いほどに締め上げられ

ピッタリと勃起した乳首をも固定している

いじらしい程の微妙な感覚だけがジワジワと乳首を襲う

もっと強い刺激を欲しがっている事は

ギンギンに勃起した乳首が物語っている



すると突然、乳輪までズリン……と音を立てて吐き出される

(……!!)

下乳から乳輪までのわずか20cm程の距離だが今まで焦らし続けられていた彼女にとって

その感覚は計り知れない

たった20cmとはいえ、

直接乳首を撩り上げられたのは事実

その快感が収まると乳輪をキュッと締め上げ

再び絶妙な性感帯だけの愛撫が始まる

身をよじりたくなる程のいじらしさに

乳房全体がビクビクと痙攣する

(コイツらっ……)

その痙攣に合わせて、ヌルヌルと触手が上下に動き始める。今まで数十分おきに行われていた

この上下運動が突然数秒単位になった事で

彼女の理性が飛びそうになる

(急につっはげしっ！・・・あぐっ)

潤滑油でヌルヌルの触手壁が乳首を

何度も何度もこすり上げる

喘ぎ声を我慢できるわけもなく

快楽を貪るように全身を預ける

「や・・・っ・・・めっ！・・・やああめっ・・・！」

背筋が反り上がり乳首だけで

イケそうな感覚になる

おっぱい全体が下品な水音を立てて

揉みくちやにされる

このまま浸っていれば確実にイケる

彼女がそう確信できるような感覚が

乳首に与え続けられている

(やめろっ、やめろやめろ

やめろやめろやめろおおっ……)

そっとな背筋を逸らし、胸を突き出す18〇

もうなりふり構ってなどいられない

するとその行動を読み切ったかのように

動きを止める触手

ビクリと体を震わせる18〇

(えっ……)



背筋を逸らしたままの自分の姿に、急に我に返る
そして赤面した

「瞬でも「せっかくイケると思ったのに裏切られた」
そう、心から思ってしまった自分がいた事に

ムカデ触手



何かが腹の辺りにべちゃっと

押し当てられるのを感じる

視覚に頼らずとも、胸の方へと

這い上がってくるのが手に取るように分かる

(なに・・・今度はなんだっ)

手(足?)の生えた緑色のムカデ状の触手が現れる

「うぐっ!」

何の躊躇もなしに触手内に潜り込むと

何十本もの長い手足を一気に乳肉に伸ばし

揉みしだくようにして強い刺激を与えてくる

「んっ!んっ!んっ!

.....!」

今まで感じたことのない快感が

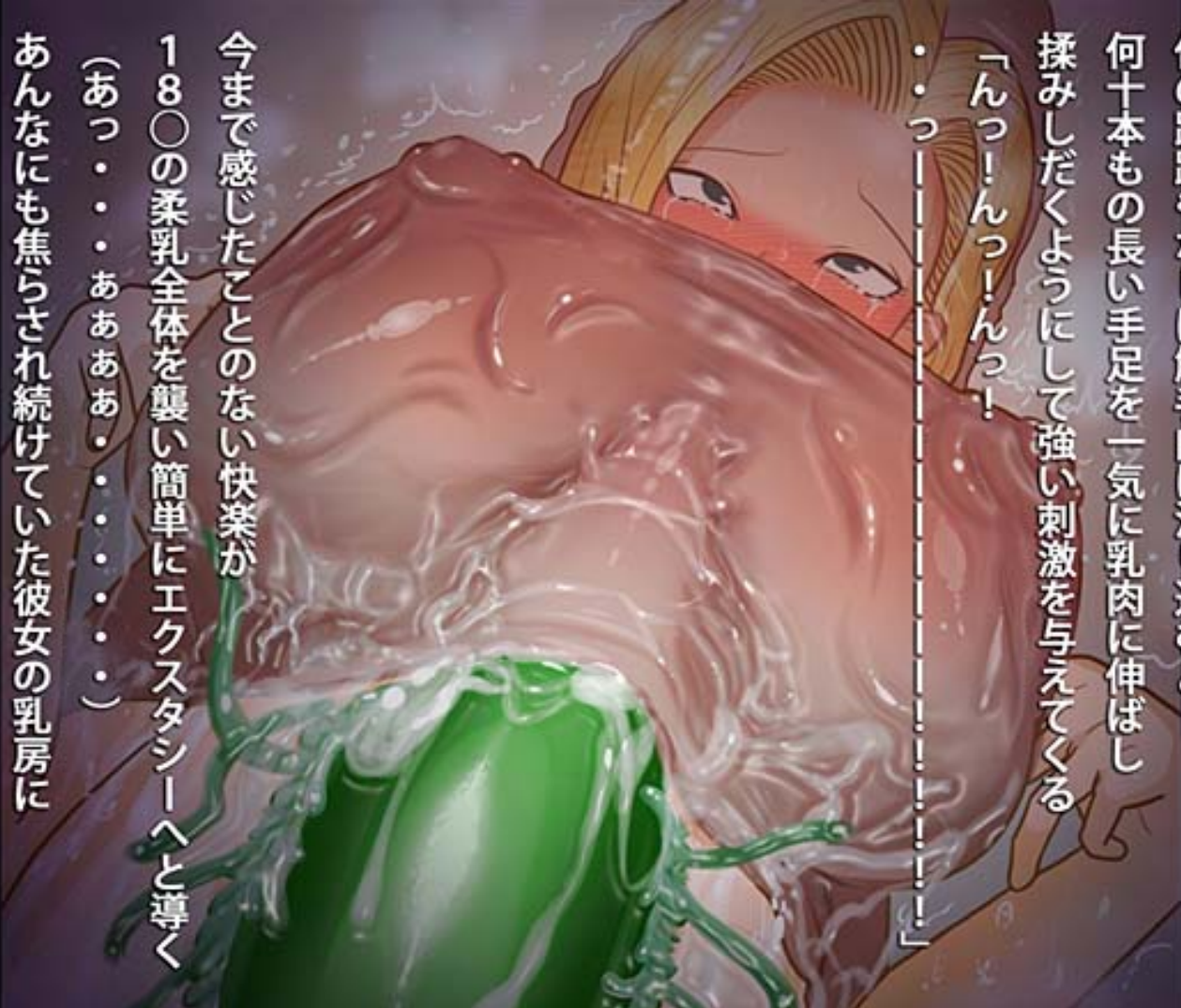
180の柔乳全体を襲い簡単にエクスタシーへと導く

(あっ.....あああ.....)

あんなにも焦らされ続けていた彼女の乳房に

突然、とてつもない快感が襲い掛かる

体が熱くなり、大量の汗をじんわりとかく



円を描くようにして乳輪をなぞり上げ

そのまま勃起した乳首へと巻き付く

ヌルルルルルル

乳首に押し付けられた彼の長い手足が

何度も何度も激しく往復する

(くっ……そっ……コイツら、

わざと同じ……場所をお……!!)

しかもその全てが膨れ上がった乳輪の上で行われる

両方の乳首を撫で回されながら

乳全体への刺激も同時に与えられている



(またイカされる、いやっ、
イヤイヤヤっ！)

乳房には何十本もの手足が這いずり回り
胸全体を扱き上げるような
激しい愛撫が止めどなく続く

「んぐっ……っ……っ……っ……っ……っ……」

あまりの快楽にイク180

散々焦らされたことで何度イッても果てることは無い

ムカデ触手の本体が痙攣を始める

ムクムクと勃起するかのよう膨れ始める

(くっ、ぐそおっ……)

クソっ！！ク……来るうう！！)

射精を予感させるようなその動きに

180自身も、彼に「パイズリ奉仕」を

しているかのような錯覚を覚えてしまう

刺激に耐えられず、またもやイキ狂う

「……………っ……………」

女がイク瞬間

同時にドクドクと射精が始まる

熱く煮えたぎった白濁液が

180の柔らかい爆乳全体に叩きつけられる

性欲の全てを吐き出すムカデ触手



白濁液が出る度にビュクビュクと音が鳴り響く

出された精液を手足で乳肉へとすり込んでいる

ジンジンと熱く、蒸れた香りが鼻を突く



研ぎ澄まされた嗅覚と聴覚に与えられる「雄の欲望」

そしてもはや性器と言っても過言ではないほどの

極限まで焦らされた乳首への愛撫により

彼女自身の脳は変わり始めていた



ヒーリング触手

媚薬の溶け込んだサラサラの液体に漬かる
180の豊満な体を包み込んだその水着は
彼女の薄桃色の肌が透けるほどに透き通り
きつく、優しく締め付けるように張り付く
「今度は・・・何をするつもり・・・だっ」



極太の触手が180を飲み込む

「いやああっ!!」

そのグロテスクな巨大触手は

彼女をそのまま吸収してしまいそうな形状をしている

が、実はむしろ彼女にとっては癒しのひととき

そう、これは食事の時間だ



疲労した体を数万の触手達が丁寧にマッサージする

体の疲れが溜まった場所を的確に揉み解す

触手の先端は硬すぎず柔らか過ぎない程度の

絶妙な硬さを勃起によって可能にしていた

癒す対象でもありながら同時に

最高のオカズでもある18〇を撫で回す

先端から出る粘液を彼女の体に刷り込むことで

彼女の疲れは徐々に癒されていく

(なぜだ・・・体の疲れがとれていく・・・?)



恥ずかしがりながらも現に疲れを取り除いてくれている
彼らに18〇も身を任せはじめ

同時に乳首へと快感を与え、脳も体もリラックスさせていく
頬を赤らめながらもそれを受け入れてしまう

癒しと愛撫を同時に浴びせられては身を任せるしかない

ひとときわたくし太く勃起した触手が

彼女の口に入り込み養分を送りこむ

濃厚な白濁液をゴクゴクと飲まされる

「じゅるっぢゅるるるるゴクゴクゴク・ハアハア」



生臭さとクセある匂いが彼女の口内を満たす

が、それと同時に快感も増じていき体中の神経が敏感になる

秘部への刺激が欲しくてしょうがなくなる

そういう食事なのだ

(体が、熱い……)

メスと化した彼女は、ごく自然な反応をし始める

腰を振って、水面に波を起こしはじめた

こつなつては誰も彼女を止められない

食事に満たされ、疲れもとれた彼女に必要なもの

残るは快樂だけだ

(なんでっ・私っ私っ・私っ)



乳首だけでは満たされない快感を自ら得ようとする

チャプチャプチャプ！

水面が緩やかに揺れる

その刺激だけで果てそうなくらいに

体が快楽を欲しがっている

(欲しい欲しい欲しい欲しい……え！……)

……私、何を考えてっ……！)



だが水面の揺れだけではなかなかイクことができない
と、口の中で膨れ上がった触手がドブドブと
今までよりも更に濃厚な白濁液を吐き出した

「おおおおっ!!!ゴキユツゴキユツ!!!」

突然彼女の体の神経が一気に敏感になる

全身がクリトリスになったような感覚を覚えたその瞬間

「んぎっ・んんんんん

んんんんん!!!.....!!!」

彼女の股間から激しく潮が噴きあがる



快感に酔いしれながら絶頂が徐々に収まる
だがすかさず口内へと流し込まれる白濁液

「くくくくくくっ」

っ.....」

体が痙攣し、汗が滝のように流れ出る

触手達にとって女体から流れ出る汗は最高の褒美だ

それを得るためなら何度でも何度でも

彼女をイカせ続けるだろう

女の体に付着したありとあらゆる老廃物は
彼にとって最高の食事だ

外側を紫色の触手が丁寧にマッサージする

同時に体にへばりつく汗や垢を美味そうに食べる

腸内、尿道を綺麗にするために

彼女の「内側」をも綺麗に舐めあげる



体内洗浄触手

彼の食卓の時間は産卵の下準備の役目も果たしている
長く太い触手を口内に入れる

(おごっ!・・・口から何かがつ・・・)

窒息しないように肺に酸素を送り込む

食道に付着した養分のカスを食べながら胃へと進み

胃の中をぐるりと舐めあげるように一周

「おえっ・・・おごっ」

繊細かつ規則的なその動きで胃の中を綺麗に掃除すると

触手の先端は小腸へとたどり着く



曲がりくねった複雑な構造の小腸を太い触手が進む度に
ボコボコと強引に形状が変化し

触手の太さ、形ピツタリに矯正されていく

「おお！おっ・・・おっ・・・おっ」

尿管、膀胱内の付着物も彼にとっては極上のスイーツ

女の体内の老廃物を体全体で這いまわりながら貪る

そしてついにそこへと到達する

可愛らしいピンク色、少しだけ濡れている出口

肛門が見えてきた

(う・っ、ウツたるっ・・・)



期待で海綿体が最大限まで肥大する
肥大により苦しそうに突き進む触手

ゴリゴリと内側をえぐり上げながらも

潤滑油で着実に出口に向かう

「んっ！！んんん！！！！！！」

「……………っ！！！！」

ビクビクと痙攣する180

どうやらその刺激だけでイッているようだ

尻肉とふとももが小刻みに震えているので誰が見ても

このメスがイッている事は一目瞭然たるう



彼女がイクのを見届けた後
極太の触手の先端が尿道、そして肛門から

ブルルン!と暴れながら飛び出た
「おっっっっっっっっっくお!!!」

その刺激だけで、再びエクスタシーに達してしまっ180
 ANALから強引にひり出されたその感覚が
よほど気持ちよかったのだろう
触手内から僅かだが叫び声が響いてくる



180の体の震えが収まるとひりだされた極太の触手は
満足気に尻肉を舐めまわす

2度のエクスタシーで滲み出た汗に

尻ごとしゃぶりつき、肛門と尿道の入り口で

小刻みに全身を出し入れさせる

「んっ…んっ…んぐいいー!!」

「……………うっっっ!!……!!」

当然、この刺激だけでも彼女の腰は浮き上がり

背筋が反り返り、足の指が開ききる

またいったようだ



1時間後

産卵の予行練習として寄生させた触手が

産み落とされようとしていた

緑色の膨らみが、水着ごしに薄うすらと顔を覗かせている

(腔内がっ・・苦しいっ、コイツら私に何をっ・・)

体内洗浄の触手とは違い、彼は赤子ながら

自らの意志で産まれようとしていた

腹圧に負けないように一生懸命に体をよじりながら

前へと着実にねじ進む



寄生触手

プリプリの膣肉から出る潤滑油が
産卵をよりスムーズにしている

本能的にそれに気づいた赤子は、自分の体を
捻るようにしてクリ○リスを転がす

「ふぬうっ!!.....」

膣口が緩むのを感じた瞬間

外へ向かって一気に突き進む

ブリュブリュと水音が響き

水着の中では彼の体でま○こ肉が

裏返るほどに広がりきる



産卵の予行練習は想像以上にうまくいったようだ
だが赤子が生まれた記念すべき瞬間だというのに
この母親は、だらしなくエクスタシーに浸っていた
「アツ……アアアツ……」



孕ませせ触手スーツ

いよいよこの日がやってきた

180のダンスパーティー会場を歓声が彩る

主催者を知るものはいないが、

男性客が山のように押し寄せていた

「この日を楽しみにしてたぜ」

「へへへ。1週間も溜めてきたよ、180ちゃん」



男性たちに見られながら

挑発的なポーズをさせられる180

「やめろっ・・・キサマらあ！」

・・・死ぬ、くそあークソおっ・・・!!」

生きたフィギュアのように艶かしいポーズを次々に演じる

彼女も始めは必死に抵抗しようとしたが

鎖のようなその凄まじい力に抗うことはできない

「はっはっはっ！そぞるねえ」



男の性欲を煽るようなポーズが決めると

ご褒美か、あるいは主を楽しませる為なのか

触手達は体中をいやらしく舐め回す

「ああっ・・・」

彼らの「口」から分泌されるローション状の媚薬が
彼女の体を包み込む

スーツ内からグチュグチュと水音が響く

その音に気づいた客達は更に興奮を高めている

「うおお、たまんねえ・・・」

「あの18〇がされるがままとか、エロすぎるだろこれっ！」



「うーっ……」

目隠し状の触手が彼女の視界を塞ぐ

突然周りが見えなくなったので一瞬パニックになる

更に湧き上がった客達の歓声が聞こえ

180の表情が強張る

アイマツサージ触手



すると、まるで彼女を安心させるような動きで

凝り固まった眉間や臉の表面を

優しく撫でる始める触手達

鼻の穴の奥や口の中までも触手を伸ばし、

同時にスーツ内からも

全身の穴という穴に媚薬を流し込む

(あっ・・・あーっ・・・ああ・・・)



その規則的とも言える動きは、乱暴に、そして着実に

彼女の脳を快楽へと導いていく

手首を撫で回した後、徐々に掌へと上り

指先の間を優しく愛撫する

足の甲からすね、ふとももの内側にかけても

ウェーブを描くように愛撫する

「はあっ・・・はあっ・・・」

クリ○リスや肉ヒダをかき分けるように

秘部の入り口を執拗に愛撫した後

乳房をタポタポと下から揺すり、快感を高めさせる

上下に揺れる爆乳が裏地に擦れる度に

乳首と乳輪全体を言いようなない快感が襲う

「んっふっ……!……ご、ゴミ……ども……」

焦らすような動きを繰り返す触手達



「うひよおお、まじでイキそうだ俺」

「エロすぎんだよ、このサイボーグ女あ!」

耳に届く男達の声

それら全てが、18○の羞恥心を徹底的に犯している

徐々に彼女の精神が蕩けていく様子を楽しむ客達

彼女の抵抗の言葉ですら

もはや性欲をかきたてるオカズに過ぎないだろう

触手スーツ内の極細触手達が一本の太い触手にまとまり

グチュグチュとま○この内部を出入りする

へびのように、わざとジグザグに進みながら

膣壁を刺激し奥まで突き進む

(えっ、今っ!?!?…今だけは

やめるっ!?!アッ…アアア!?!)



「んっ!?!」

子宮口にぶつかると器用に

先端の触手達が広がり、子宮口をパツクリと開く

開かれた瞬間の180の表情は、男達の興奮を更に高めた

なぜならその表情から彼女がイっている事は

誰の目にも明らかだったからだ

「この女、本気でイってやがるぜ!」

「死ぬほど負けず嫌いだったあの180が

目の前でイッてる!夢みてえ!」

軽く達したことで潤滑油である愛液が大量に溢れ出る

無防備になった子宮めがけて数本の触手が

ネチネチと入り込んでいく

ビクビク震えながら必死に呼吸をする18〇

この日の為に彼女の体は

ほんの僅かな刺激でイってもおかしくないような体に

徹底的に養成されているのだ



子宮内に辿り着く極細触手

種付けが可能なことを知らしめるような動きを繰り返し

ついに、触手の一本が卵子に触れる

「ンンンんん」

容赦の無いエクスタシーが彼女を襲う
達しても尚、体の震えが止まらないのは
更に数本の触手が卵子を包み込んだからだろう

「アガアア………！！！！！！」



10本、20本、30本と、

極細の触手が卵子を丁寧に包み込む

グミのように繊細な卵子壁を優しく圧迫して絡みつく
いつ孕まされてもおかしくはない

「ハッ……ハッ………」

男達の目の前で絶頂する事への羞恥心
そしてこの後、自分が確実に彼等に
孕まされてしまう事への悔しさで
涙と震えが止まらない180

会場から男達の声が響く

「孕ませる孕ませる孕ませるー！」

「や・・やめて・・くれっ！ぬいて、抜いてくれっ！」

（孕ませられるっ孕ませられるっ・・・）



その歓声が彼女のつま先から頭の先

そして脳味噌までをも犯す

「孕ませる孕ませる孕ませる！」

「……イヤ！イヤイヤイヤイヤあぁ……！」

（孕ませられるっ孕ませられるっ孕ませられる………！）

抵抗しようのない事が卵子を通して肌で分かる
スーツが体を締めあげ

顔面のマッサージの動きも早くなる

「孕ませる孕ませる孕ませる！」

妊娠という言葉が徐々に現実味を帯びてくる

（孕ませられるっ！私・孕ませられるっ

孕ませラレル……！これから孕ませられる……

孕ませられるんだ私っ……ハラ……マセ……

イヤ……孕ませられるのイヤっ……っ

孕ませられるのイヤあ……！）

ぞわぞわと優しく動いていた触手が
乳首を重点的に舐め回す
孕むまであと何秒の猶予があるというのだろうか

「孕ませる孕ませる孕ませる孕ませるー!」



「せ……る……なっ……!!」

孕ませるなあああ

あー!……!」

そしてその時は突然訪れる

ドクン!!!

「っ!!!」

「.....」



「孕んだ！ー！この女、孕んだぞっ！ー！」

「イクイクイク！18〇おお！ー！」

今日の前でこの女は孕んだ

その声をきっかけに男達は一斉に射精を始める

イキきったその顔面目掛け射精する者

柔らかな乳房にぶっかける者

各々が欲望のままにエクスタシーを楽しむ



極細の触手が卵子を揉みほぐす
そしてその小さな小さな卵子の中には
しっかりと1匹の精子が潜り込んでいた



全身丸呑み触手



セ〇のタマゴの産卵は1ヶ月周期だ

受精した1時間後から腹が膨れ始め

胎内で複数のタマゴが生成されていく

15日に腹の膨らみは最大となり

母体が快楽を得ること子「質」が向上する

そして一ヶ月が経った頃、めでたく
ポコポコと5〜10個のタマゴを産み落とす
妊娠20日の彼女の腹は
パンパンに張り、立派な妊婦になっていた



体の快樂

そして脳へと快樂を得ること

子は、より強く育つ

丸呑み触手から出る分泌液の量が増す

妊娠した彼女を飲み込んだ事

そして、より強い子供を養成できる事に

期待に胸をふくらませているのだ

180の柔らかな肌

ミルクタンク化した豊満な乳

ムチムチに張った腹を撫で回す

この柔らかい女体の中に沢山の子供がいる

丸呑み触手は体を震わせて喜んでいた



「んんっ!!」

徐々に内側に圧をかけ

体をグボグボと吸い上げる

内部に無数に生えた触手の海綿体状の

組織が肥大し、それぞれの先端が

勃起したかのように膨れ上がる

コリコリに勃起した乳首をつまみ上げ
タポンタポンと中に詰まったミルクを
確かめるように乳への愛撫を繰り返す
「ひゃっっ・・・揺らす・・・なっアア！」



彼女の汗を美味そうに舐め取り

その度に分泌液の量が更に増していく

そのまま締めあげるのかと思えば

圧迫と緩みを繰り返す触手

下から上、上から下に波のように体を締め付ける

(体がああ・・・締め付けられ・・る)

更に締め付けて密着感を増す
ま〇こがビクビクとひくついている事から
彼女が期待していることは明らかだ



物欲しげな18〇の表情に

彼の興奮が更に高まる

ヌルヌルの女体を今まで以上の力で締め上げる

胎内の子供たちに被害がでないように

絶妙な力加減で行われる

(うごお!!!.....)

その絶妙な圧迫感に彼女の顔が徐々に雌へと変貌する

イク事から逃れられない事を本人も悟ったようだ

(また・・・また、イカされる・・・イガされるー・・・)

グポグポと全身を締め付け

軽く緩めたかと思えば、また激しく締め上げる

これだけで一瞬にしてイキ果てる女



エクスタシーが収まるのを待つ

この行為すら、次のエクスタシーへの序曲に過ぎない

そして女も徐々に気づき始めている

このエクスタシーが終わっても

またすぐに絶頂に達せられてしまう事を

産卵補助触手



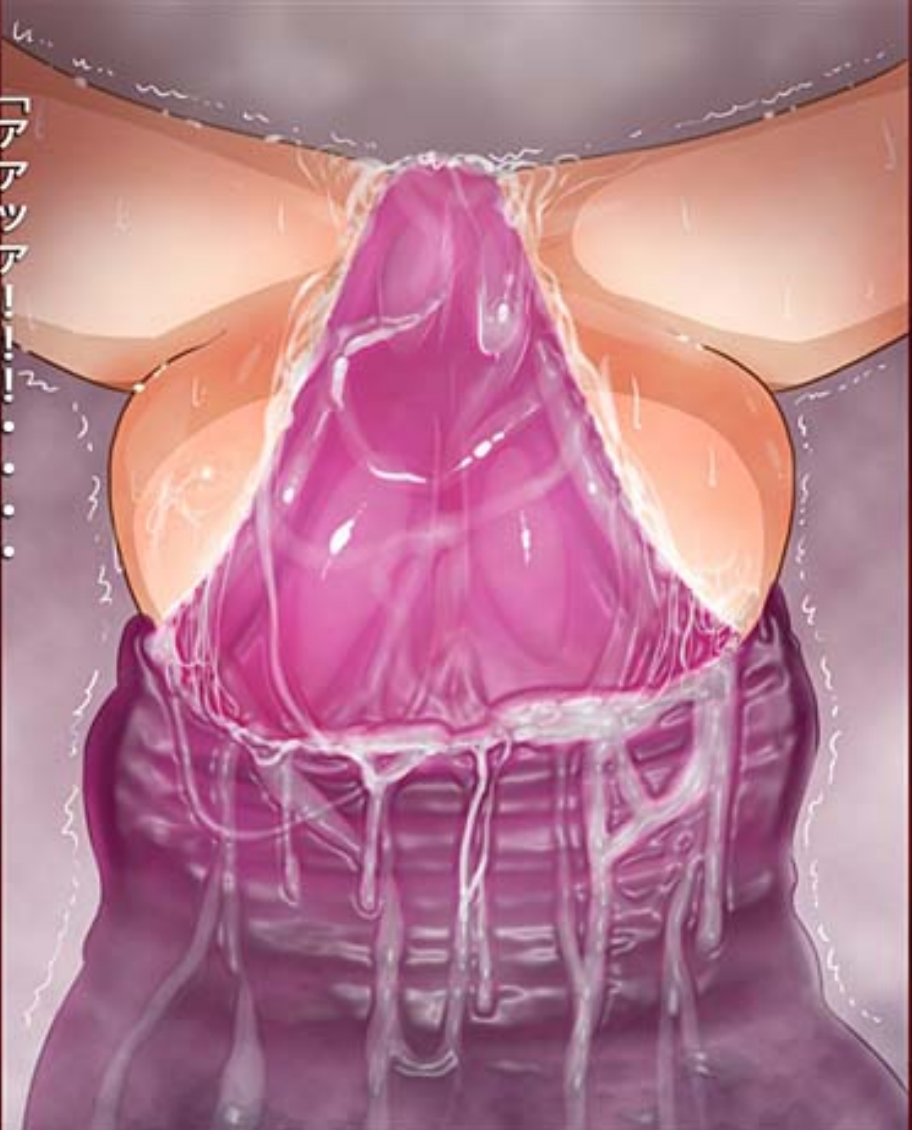
まるで仮性包莖のような形状をした触手がズッポリと彼女の上半身を飲み込んでいた

生命維持や養分供給も念入りにされ

今日まで、爪の間の垢掃除まで大事に管理されてきた彼女しかしこれ程までに情けなく不細工な格好で

産卵を迎えるとは彼女自身、想像もしなかった事だろう

舌の形状をした触手がヌプヌプと隙間から出てくる
彼女のま○こをベロベロと舐めあげる
産卵を煽るように大陰唇を広げ、
押しつぶすようにしてクリ○リスの皮を剥きあげる



「アアッアッ……」

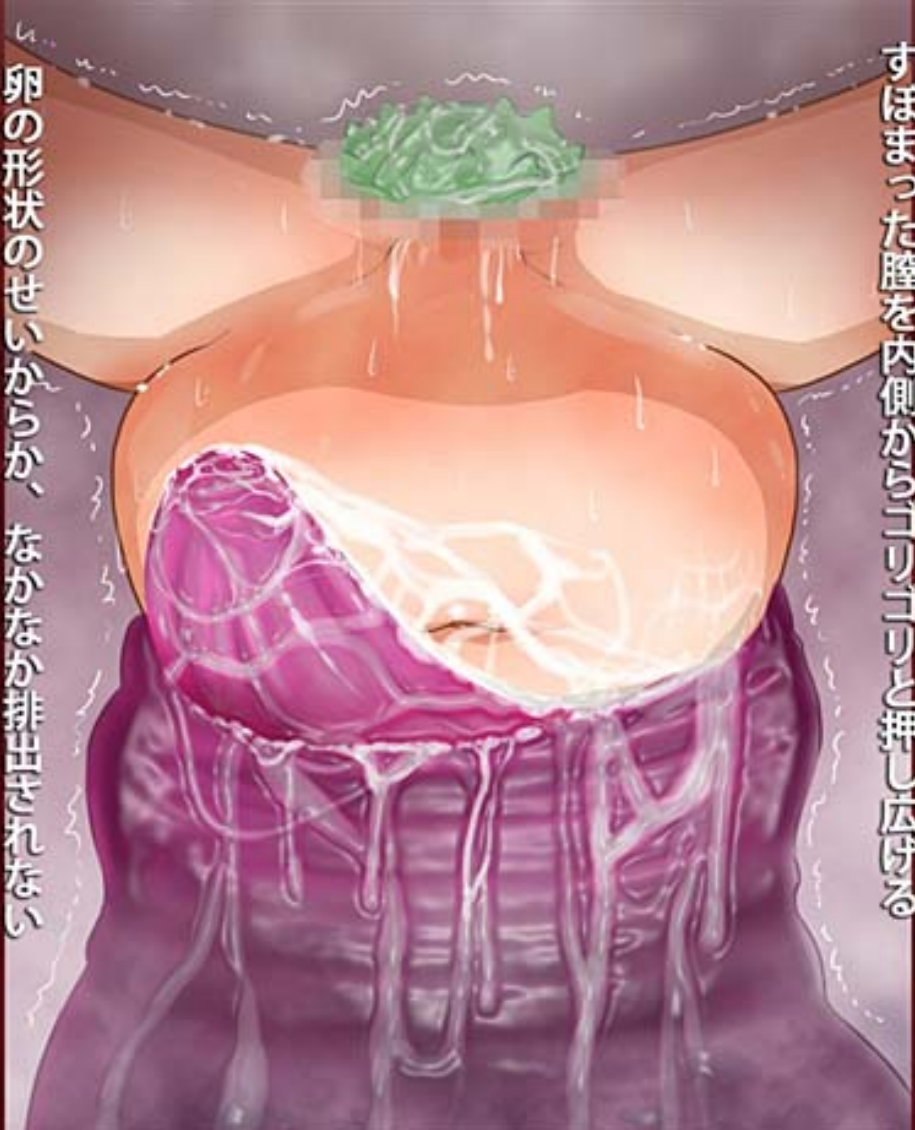
「っ……っ……」

それだけの行為で彼女の体は震え、

足がだらしなく開ききる

もう言っまでもないが達したのだから

尿道、肛門、膣の3点同時攻めで
産卵の苦しさを忘れるほどの快感を彼女に与える
と、ついに卵が頭を出した
イボイボの突起が付きだした卵が
すぼまった膣を内側からゴリゴリと押し広げる



卵の形状のせいからか、なかなか排出されない

仮性包茎触手が産卵の手伝いをする

どっつやら潤滑油が足りない様子で

女を後二回ほどエクスタシーに

到達させればすんなりと産卵できるようだ

ヴァギナ全体をほぐすようにベロで優しく撫で回す
ぽっかりと開いた秘部を卵ごと包み込み
下品に水音を立ててしゃぶりあげる



「んふっ.....んっ.....んぐっ.....」

.....

その間抜けなふとももがビクビクと震え、

じっとり汗をかいて開ききる

もう1回目に到達したようだ

あと一回イカせる為に

軽くアナルを解しリラックスをさせる触手

仮性方形触手の内側から何やら声が聞こえてくるが

そんな行為など既に何の意味もなく、

もはや雑音以下なのだ

「や……っ……ヤアア……アアア……」

なぜなら、アナルを舐めほじくる舌触手が

べロりと尻肉を舐め上げ、徐々にクリ○リスへと近づく

今この瞬間、既に雌はエクシタシーを期待しているのだ

あえてこうしてクリ○リスには触れずにいるだけ

そこまでは雌に理解できるかどうかは謎であるが

現に、先ほどよりも声が小さくなっている

そう、雌と化しては所詮そんなものなのだ



そんな遊びもあっさりと終わる

グルンと一周してきた舌触手がクリ○リスに触れたのだ

「んっっ……むっっ……！」

「あああああ————っ」



仮性包茎触手内の雌は当然エクスタシーに達する

今回はイキ続けている間も

クリ○リスをねぶり続ける舌触手

鳥肌が立つほどの快楽にパカパカと

太ももが開いたり閉じたりする

次の卵を期待するように舌を伸ばす
膣口にべろを忍ばせ、そのまま子宮へと潜り込む
子宮内にある卵はまだまだ沢山ある



一つ産み落としたことで子宮内に空間ができた
そこをゴリゴリと押し広げ、次の産卵の時に
より多くの卵が生成されるようにスペースを作る触手
(腹の中・・・かきまわす・・・なっ・・・あああ!!)

腹の形が歪むほどに、ニチャニチャと子宮内をかき混ぜる触手の先端が卵達に触れる度に、ゴロゴロと卵同士がぶつかり合う音が響く
その感覚は子宮壁を通じて彼女の脳ミソを蕩かす



彼女に、女しか感じることでできない感覚が訪れる
次の産卵を迎えるのだ

秘部が再び濡れ始める180

自ら太ももを極限まで開き全てを差し出すかのようにも
見て取れるがそれは定かではない

(イヤ・・・また、またきそう

・・・生まれ・・・るっ・・・)

いきんでいる事が、肛門から見てとれる
愛撫されすぎてほんのり茶色が色素沈着した肛門が
呼吸をするように開いては閉じる

プルプルと体を震わせながら
必死に膣口をパクパクと開く

内側の膣肉が外側に飛び出そうとしている所を見ると
もうすぐ緑色の卵が顔を出すようだ



その状況を上からじっくりと見守る仮性包茎触手
女が必死にいきむ姿

そしてそれを手助けすることが彼にとって
最高の快樂なのだ

そのタイミングは今ではない
今助けては、彼女が「自分の力で産み落とそう！」
という意志を閉ざしかねないからだ

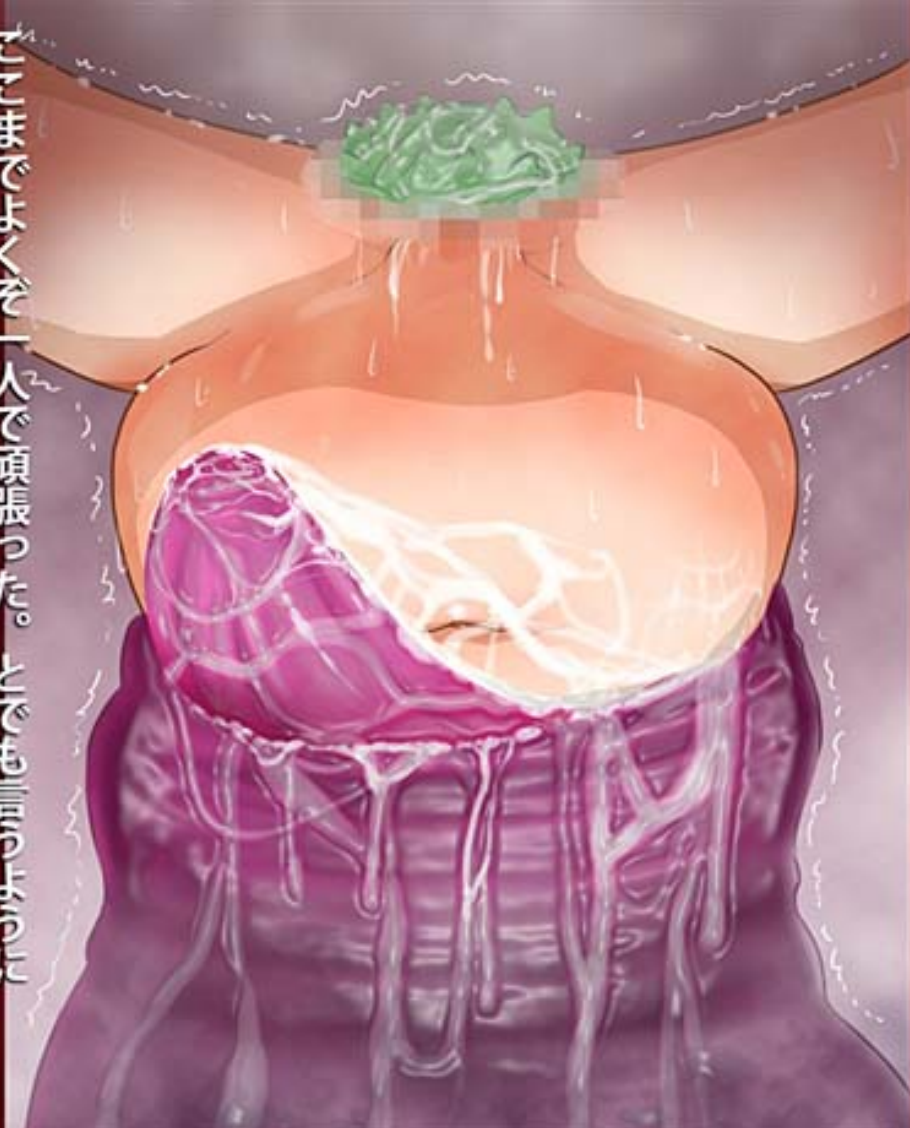


(ハッ……ハ——
あああっ……あゝ……あはっ……)

そうこうしている内に、大陰唇は伸びきり

濡れたピンク色の小陰唇が裏返る程に盛り上がっている

ヴァギナ全体を押し上げるように緑色の頭が顔を覗かせる



ここまでよくぞ一人で頑張った。とでも言うように

仮性包茎触手は大きく舌舐めずりをし、

嬉しそうに彼女を見下ろす

もう少し、もう少し、ふとももを開ききり

腰を突き上げ自ら秘部を見せつけるようにする180

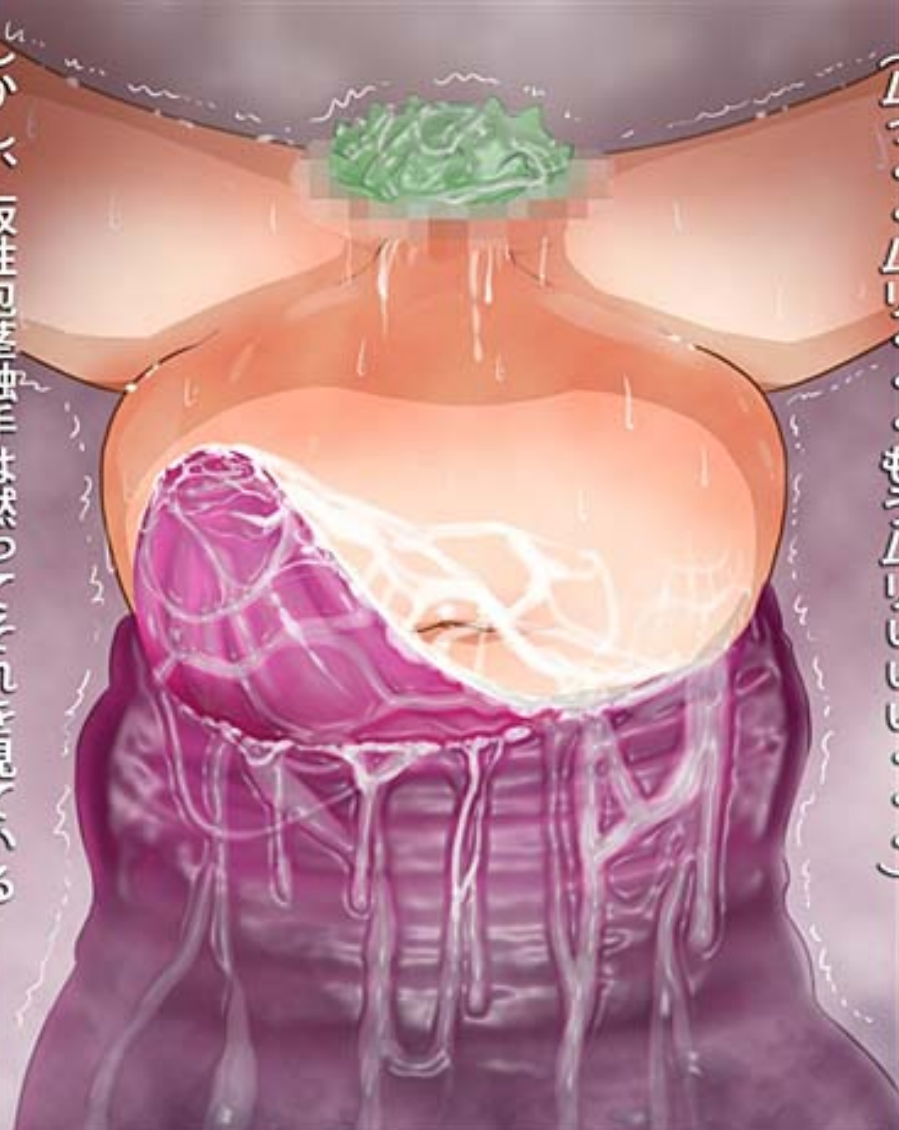
先ほどのようにその唇で吸い上げてと

助けを求めるかのように必死に腰を震わせる

しかし、いきむ事への疲労からか

パツクリと開ききっていた彼女のヴァギナと肛門がすぼむ

(ムっ……ムリ……もうムリいいい……)



しかし、仮性包茎触手は黙ってそれを見ている

まだ手伝わないようだ

上半身を包み込んだ触手が

彼女の敏感な勃起乳首を優しくマッサージする

「んんっ!……」

それを見た仮性包茎触手は、ようやく行動に出る
彼女が自分自身で頑張った事への褒美なのか
ジュルリと舌先を当て
彼女の今までの努力の全てを引き継ぐかのように
優しく秘部にかぶりつく



全身の力が抜けグツタリと足が開ききる180

苦しさと快楽の間で体をビクビクと震わせながらも

仮性包茎触手へ卵を預けようと膣肉に力を入れて押し上げる

ま〇こ肉と卵の間に長い舌先を滑り込ませる触手

彼女自身は気づいてはいないが、触手にその身を委ねていた

ゴボン！

先程よりも大きな音が鳴り響く
卵を産み落としたことで

彼女は全ての苦しみから開放された

「い……や……もう、イヤア……」



これから先も彼女は数百、数千の卵を産み落とす事だろう
そして、それらと同じ数

あるいはそれ以上のエクスタシーをその身に受け入れるのだ

触手スーツ



玉虫色の怪しい光沢と

ラテックスのような質感のスーツ

彼女の色気を最大限にまで引き出していた

180の豊満な女体に張り付き

体のラインが恥ずかしげもなく露にされている

(こんなものを着せて・何を企んでいやがる)

奇抜ではあるが一見何の変哲も無いこのコスチュームの内側には小ぶりの触手がビッシリと生えていて常に18〇の柔らかかな全身をネットリと舐め回していた優しく、それでいてきつく拘束された彼女の体の自由はもはや無い表情以外の行動は、スーツによって全て制限されているすなわち、スーツの主である人造人間セ〇の意志で彼女の行動の全てが遠隔操作されていた



工場地帯を歩く（歩かされる）18〇
プリプリと弾力があり、しっとり濡れた数万本の触手が首からつま先まで執拗に愛撫する

「んん・・・」

波のようにウェーブを描いて

丁寧に指先でなぞりあげられるようなその感覚は

強がる彼女の体すらも快楽に震わせるほどだ

勃起乳首やクリ○リスをねちっこく
攻め立てられると呼吸が荒くなる
ま○この入り口をクチュクチュと
なぞりあげたかと思えば、
ふいにその快感が止んだりもする



女の子の気持ちいい場所の全てを
知っているかのようなその動きに
いじらしささえ覚える

(何なんだよ・・・!この服はっ・・・!)

体の火照りが抑えられない事に動揺しつつも
動きが収まった事に多少なりとも安心する18〇
心を鎮めようと大きく息を吸ったその瞬間
ぞわぞわとクリ〇リス周辺に快感が襲いかかる
(この服・・・どこを触って!)



何の遠慮も無く子宮の最奥まで突き上げる

グチュグチュに濡れた肉褻はすんなりと触手達を受け入れた
声を我慢できないほどの快感が体を襲う

「あああ!・・・あつ・・・ぐ・・・!」

その強烈な快感を隠そうと、体を小さく屈めようとする18〇

(ダメだ・・・声なんか漏らしちゃ)

すると突然、スーツは彼女の体をガッチリと締めあげた
背筋を反らし、腰に手を当ててモデルのような歩き方をさせられる
(体が・・・締め上げられるっ)
屈めるどころか、むしろ周りの視線を
挑発するようなポーズを仕向けられる
スーツ内で彼等が背中を押し、
豊満な乳房が裏生地へと押し付けられる



母乳をせがむ赤ん坊のように、
その大きな乳房へと絡みつく触手達

「胸が・・・ふああ・・・!」

体中を常に攻め立てられながら
ファッションショーのような挑発的な歩き方をさせられる
周りを歩く男達の視線は当然ながら彼女へと向けられる

必死に男達から視線を逸らそうとする
が、乳輪から勃起乳首にかけて
プルプルのミニズ状の触手が絡みつき彼女を蕩けさせる
同時にクリ〇リスをシコシコと扱き上げ
子宮内にも無数の触手が更に侵入する
男の視線というものは実に素直で
彼らの彼女を見るその目は雄そのもの



それを18〇が気づかないわけがなく
その野獣のような視線の中を歩く事は
彼女にとって死ぬほど恥ずかしい行為であろう
(ヤツらに見られてるっ、こんな姿・・・あああ)

もし羞恥心というものに形があるのなら
今まさに、無抵抗のそれは男達によって視姦され
すぎ放題に撫で回されているのと同じだ
時折、白目を剥きそんな快感に襲われながら
小一時間ほど、人気のない工場地帯を歩き回され
ようやく主のもとへと戻る180



ブニラシ触手

襖の間

そこで彼女の体は清められていた

彼女の着るその服はスク水のようにも見えるが

もっと極薄の素材

(小さな触手達が集まって形成されたもの)で

縫い上げられ、その柔肌へとピッタリと張り付いていた

(体が熱い、なんなんだこの服はっ……)





突然、二本の触手が股間にへばりつく

「んんっ!!」

緑色の触手の片側にピンク色の

柔らかいブラシ状の触手が何万本も生えている

クリ〇リスを挟みこむように二本のブラシ触手が

息を揃えてゆっくりと前後に擦り上がる

「んぐっ!・・・うっ・・・うう!」



極薄スク水の生地ごしに、触手の一本一本が
プリプリと勃起していくのが伝わる
何百本もの指先のような触手がとめどない愛撫を繰り返す
「だめっ、やめろおっ、ソレ・今すぐ・・・！」
時折、彼等の意志とは関係なしに無造作に
クリ○リスの包皮がまくり上げられ
逆向きになることでじわじわと包皮が被る

剥けた瞬間に、とてつもない強い快感が秘部を襲う

「くっっっ・はっ・なせえっっ・あああ！」

体の震えを隠そうとするが

媚薬の溶け込んだプールにより彼女の体は思うように動かない

(やめろっ、そんなの続けられたらっ・)

本当に、本当にっ！アアアアッ！)

密着したままの愛撫で腰が浮くほどの快感を送り続ける

どんなに不感症な人間でも

これに耐えられる女はまずいないだろう





「ああああああっ！・・・あっ・・・あつ・・・あつ！・・・！」
無数の触手が見守る、今この瞬間も
18〇は快楽に溺れ、そして必死に呼吸をする
呼吸する事と快楽を楽しむ感情だけがその身を支配し
それ以外は必要無いとも言える瞬間
頭の中からつま先まで雌になり
エクスタシーに浸り、そして狂う



先ほどまであんなにも激しく愛撫していた触手も
この瞬間だけは彼女を優しく見守る
こんなにもデリケートで、そして
快楽に身を任せられる瞬間は他にはない
彼等はそれを十分に承知しているのだ
ビクビクと腰跳ねさせながらも、
徐々に体の震えが収まっていく180



突然スピードを上げて180°の快感を高めたかと思えば
ヌルヌルとゆるやかに速度を落とす、

触手も柔らかさを取り戻す

(また、さっきの動きかよ・・・!こんなのをされたらっ・・・)

いじらしさに少しだけ腰を降り始める180°

するとその動きに同調するように片方の触手は上へ

もっ片方の触手は下に動き始める

(んんっ!それっ・・・さっきよりも効きやがる・・・!!

こいつらまたイカす気が・・・!)

それぞれが別の方向に動きながら

触手の一つ一つが先程よりも固く動き始める

トロトロの媚薬の量も更に増し、勢い良く
秘部を舐め上げ続ける

クリ〇リスは両側からズリ上げるようにして乱暴に剥かれる

「それだめっ・・・あああ！！！！」

「・・・んいいいくっ！！！！！！！！！！」

そして、またもや果てる18〇

彼女の体に浸透した媚薬が、エクスタシーを増幅する

剥き出しになった女の弱点を曝け出すように

両足を更に開く18〇

それは媚薬の力によるものなのか

彼女の意思によるものなのか





スピードが緩み、今度はそれぞれが逆方向に動こうとしている
足を開いてその時を待つ180

(コイツ・・・さっきと違う事をしようとしてやがる・・・
・・・あああつ・・・来る、来るう)

それを待つ時間の長さをじわじわと楽しむ彼等

この後、この女がイクという事は誰もが知っている

あえてそれをしないという楽しみ方もあるが

彼らは素直に彼女の願望を形にした



彼女の気持ちに答えるように逆方向へと移動する触手
勃起触手がスルスルと粘着質な水音を立てて

クリ○リスから尿道、アナルまでも、

それぞれの形が変わるほどに激しく擦りあげ続ける

「ぎたぎたあっ・・・」

「いっちやう・・・いくう!!!!!!」



彼女に、この瞬間を最も幸せなものと感じさせるように
そして彼女の全てを受け入れるかのように
速度を上げ続ける触手

深い呼吸に合わせて速度を緩めそして急速に上げ
エクスタシーをより長く楽しませる

「あああつああつー・・・ダメえ・・・だめだめえ・・・！」



クリ○リスが振るえ尿道付近がヒクヒクし始める
これは女が潮を噴こうとしている前兆

「ダメダメだめええ……！」

ほんとにダメだ！それ以上はっ……！」

あんなにも強気な180が

恥ずかしげも無く潮を噴く準備をしている

脳も体もそれを求めている限り

それは起こり得ない

これ程までに興奮できる事が他にあるだろうか

触手達は一斉にその手助けをする

そう、これは手助けだ

彼女が求める快感を「与える」

その行為が触手達にとって何よりも快感となる

そしてこの先、何週間、何年間もこの禊の間での

彼女との戯れを待ちわびる理由となる激しい水音が響き渡る

「ほんとに・・ほんとにダメ・・ダメダメもうダメ！」

ブジュブジュと粘液が絡み合い、クリ○リス

尿道、アナルに快感を送り続ける

(私、コイツにまたイカされる！・・イカされる・・)





彼女の体はイク準備を始める

(でもっ、でもこんなに気持ち良いの・・・始めて・・・
足を開き、背筋を反らす

(今ならどうせ・・・誰にも見られていない・・・)

人目など気にせずイキ狂えるこの空間を見渡す18〇

(いいよ・・・な・・・一回くらい・・・)

一回くらい本気でイっても)

今までよりも更に足を開く



(一回・・・この一回だけだ！ホントに・・・
一回くらいならクリンも許してくれる・・・だろ・・・)
舌をだらしなく伸ばしきり恍惚とした表情で受け入れ続ける
(ていうか、そもそもバレないっ・・・
あっおおお！・・・一回だけ一回だけええ！くるっくるう！)
そしてついに彼女は潮を噴き上げた

今この瞬間、死んでしまってもいいと女に
思わせる程の愛撫で攻め立て続ける触手達

「ま〇こ！こわれるうう、

おおおおおっほおおお——！！！！

あつ・・ああああつ・・・





(あああ・・本気でイってしまった・・
ごめんよクリオン。もう、二度とこんな事・・)
ビクビクと体を震わせ
徐々に180の意識が朦朧としていく

乳しやぶりつき触手



上半身を包み込む触手

プリプリと突き出た乳輪に引っ掛けるようにして

多少、物足りなさを覚える快楽を与える

乳首の感度を上げる事により女の艶は格段に増す

更に目隠しをすることにより視覚に頼らない
真の快感へと導く

女の快感を磨き上げるこの触手によって

180の大きな乳肉が

優しく、丁寧に、数時間に渡って愛撫され続けていた

(な・・・なにが目的なんだよ・・・この触手は)

バクッと音を立てて乳全体を飲み込む

下乳に口を引っ掛けるように固定すると

タポントポんと小刻みに上下に揺らし始める

包み込まれた触手内で乳首が擦れ

凄まじい快感に酔いしれるかと思いきや

胸の周りだけ真空に近いほどに締め上げられ

ピツタリと勃起した乳首をも固定している



いじらしい程の微妙な感覚だけがジワジワと乳首を襲う
もっと強い刺激を欲しがっている事は

ギンギンに勃起した乳首が物語っている

「はぁっ・・・はぁっ」



すると突然、乳輪までズリン！…と音を立てて吐き出される
「ああんっ…！」

下乳から乳輪までのわずか20cm程の距離だが
今まで焦らし続けられていた彼女にとって
その感覚は計り知れない

たった20cmとはいえ、直接乳首を擦り上げられたのは事実

その快感が収まると乳輪をキュッと締め上げ
再び絶妙な性感帯だけの愛撫が始まる
身をよじりたくなる程のいじらしさに

乳房全体がビクビクと痙攣する

(こいつら、私で遊んでやがる！)

その痙攣に合わせて、ヌルヌルと触手が上下に動き始める
今まで数十分おきに行われていたこの上下運動が

突然数秒単位になった事で彼女の理性が飛びそうになる

「んぐっ!・・・急にっ」

潤滑油でヌルヌルの触手壁が乳首を
何度も何度もこすり上げる

「こんなに焦しておきやがって、あああっ・・・クソっ!」
喘ぎ声を我慢できるわけもなく
快楽を貪るように全身を預ける



背筋が反り上がり乳首だけでイケそうな感覚になる

(ダメだっ・・・この刺激・・・)

これ！コレ、イケるやつだっ・・・！)

おっぱい全体が下品な水音を立てて揉みくちやにされる

このまま浸っていけば確実にイケる

彼女がそう確信できるような感覚が乳首に

与え続けられている

(くうっ、もうイカないって決めてるのに！・・・でも！)

そっと背筋を逸らし、胸を突き出す18〇

(また何時間も刺激が無いかもしれないっ

・・・今回、今回だけ・・・いいよな)

もうなりふり構ってなどいられない

胸を更に突き出してイク瞬間を待つ

するとその行動を読み切ったかのように
ピタリと動きを止める触手

体を震わせる18〇

「え……………」



背筋を逸らしたままの自分の姿に、急に我に戻る

そして赤面した

一瞬でも「せっかくイケると思ったのに裏切られた」

そう、心から思ってしまった自分がいた事に

(コイツ…こいつらあ…!…!

人をコケにしゃがってえ!…)

ムカデ触手



何かが腹の辺りにべちゃっと押し当てられるのを感じる

視覚に頼らずとも、胸の方へと

這い上がってくるのが手に取るように分かる

(んっ！腹に何かが張り付いて)

手(足?)の生えた緑色のムカデ状の触手が現れる

何の躊躇もなしに触手内に潜り込むと

「なにつっ…するっ！やめるんじゃなかったのかっ！」

何十本もの長い手足を一気に乳肉に伸ばし

揉みしだくようにして強い刺激を与えてくる

そして期待に震える18〇の乳首をひねりあげた

「あっおっおっおっおっおっおっ……
イっっっっく……く……く……
っっっっ……っっっっ……」



今まで感じたことのない快楽が180°の柔乳全体を襲い
簡単にエクスタシーへと導く

「あああー！・・・ちくびっ、ちくび・・・イイ」

あんなにも焦らされ続けていた彼女の乳房に
突然、とてつもない快感が襲い掛かる
体が熱くなり、大量の汗をじんわりとかく

円を描くようにして乳輪をなぞり上げ
そのまま勃起した乳首へと巻き付く
ヌルルルルルル
乳首に押し付けられた彼の長い手足が
何度も何度も激しく往復する

(そんなんっ、ウソだぁ・・・！)

私が乳首だけでいっただなんて)



しかもその全てが膨れ上がった乳輪の上で行われる
両方の乳首を撫で回されながら

乳全体への刺激も同時に与えられている



(またイカす気だっ、この動きだけで・・・分かるっ)

乳房には何十本もの手足が這いずり回り

胸全体を扱き上げるような激しい愛撫が止めどなく続く



「こんなのっ・・・
こんなのされたらまた！
あああ！・・・
きた・・・きたああっ！
いっくっ・・・きたああっ！！」

あまりの快楽にイク18〇

散々焦らされたことで何度イッても果てることは無い
ムカデ触手の本体が痙攣を始める
ムクムクと勃起するかのように膨れ始める

(はあ、はあっ・・・んっ、
疲れ知らずかよっ、またくるっ)

女がいく瞬間

同時にドクドクと射精が始まる

熱く煮えたぎった白濁液が

180の柔らかい爆乳全体に叩きつけられる

性欲の全てを吐き出すムカデ触手



白濁液が出る度にビュクビュクと音が鳴り響く

出された精液を手足で乳肉へとすり込んでいる

ジンジンと熱く、蒸れた香りが鼻を突く

研ぎ澄まされた嗅覚と聴覚に与えられる「雄の欲望」
そしてもはや性器と言っても過言ではないほどの

極限まで焦らされた乳首への愛撫により
彼女自身の脳は変わり始めていた

